

サラマンカ声明におけるインクルージョンの意義

佛教大学大学院 布留川 富雄

キーワード：障害児教育 インテグレーション 特別なニーズ教育 インクルージョン

はじめに

1987年佛教大学通信教育部の夏のスクーリングで、初めてインテグレーションとインクルージョンの言葉を聞いた。今から16年前になる。その時に疑問が残り、自分は障害児教育をしたいの、わざわざ自らの手で障害児の子どもたちを離さなければならないのかという理由が理解できなかった。それは今も払拭されていない。インクルージョンを行うことでなくすことも必ずあり、どんな良い効果があるのかが見えてこないからだ。障害児学校の教員たちも今まで積み上げてきた実践が無意味なものにならないのかという不安も抱いてしまいかねない。そういう意味からもこのサラマンカ声明を分析し、この声明の中には何が隠されているのか、また、なぜこのインクルージョンの取り組みを世界に発信しなければならないのかを研究することで、絡まった糸を解きほぐすことができるのではないかと考えた。

1. インクルージョンとは

1) インテグレーションとインクルージョンの違い

インクルージョンとは一般的には、障害のあ

るなしにかかわらず、すべての子どもたちを包み込んだ教育を行うという意味で使用されることが多い。インテグレーション（統合）と混同されて使われる場合もあるが、基本的にははっきりと区別されなければならない。また、人種差別撤廃の意味が含まれている。統合は児童・生徒を障害のあるものとないものに最初に分けて考える。（アメリカにおいては二元論）それを主（障害のないもの）に副（障害のないもの）を組み入れようとする考えである。最初から主を決めているわけで、圧倒的多数＝通常の形式が作られている。多ければそのグループが正しく普通の形式であり、その中に入れさせてもらうのが好ましいという考え方になってしまっているので、再考すべき考え方である。そういう意味で、インテグレーションの二元論も実際に平等の上に立った二元論ではなく、一方が元々劣っているという意識が前提にある。これでは二元論ではなく、強弱論か、多数派吸収の原理になってしまう。それに対しインクルージョンというのは、児童・生徒は一人ひとりがそれぞれ違う個性を持つユニークな存在であり、一人ひとは違うのが当然であるという考えで、違いに応じた教育システムを進めるという一元論に立っている¹⁾。

2) インクルージョンまでの経緯

元をたどれば、障害のために学習したくてもできない児童・生徒に教育を受ける場を作るこ

とは重要なことで、ただ、そのときに一般校と一緒に授業を受けにくいから違う場所で行っているという教授方法の違いだけであり、できることならば同じ学校で授業をしたかったに違いない。ただし、それまでが障害のあるものは学校に行くこと自体が考えられていなかったもので、行けたことがとても重要だと考えられる。だから、障害があって学校に行けなかった児童・生徒に目を向けた時から、インクルージョンの芽が出ているのではないだろうか。それを始まりとするならば、1760年フランスのド・レペがろう学校を創設した時に始まったといっている。もちろんそれ以前にも、各地方でその取り組みが行われているはずである。その後240年間紆余曲折を経てインテグレーションからインクルージョンの考え方にたどり着いた。もちろん今後もまた違ったより進んだ考え方も出てくるだろう。世界においても、アメリカ、イギリス、イタリア、フランス、スウェーデンなども障害のない児童・生徒と障害のある児童・生徒を分離した教育から、インクルージョンに進める取り組みがなされてきた。特に統合教育を基本方針にすえる世界各国の障害児教育政策の変化を支えた理念はノーマライゼーションという考え方だった²⁾。北欧を中心とするこの考え方は、1970年代初頭に北米に導入され世界に広まっていき、1980年、国際連合の「国際障害者年行動計画」の中に盛り込まれた。デンマークのミケルセン（Bank, Mikkelesen, N. E）とスウェーデンのニリエ（Nirje, B）である。二人のノーマライゼーションは、障害者の生活を一般の人々のものに近づけようとするもので、画期的であった。当時、北欧の福祉サービスは世界的にも極めて高い水準にあったが、彼らの示した考え方によって、施設を中心として一般社会から切り離されて提供されていたサービスは、地域社会をベースとしたものになっていった。

国際連合の「国際障害者年行動計画」では、社会が「一般的な物理的環境、社会、保健事業、教育、労働の機会を、さらに、スポーツを含む文化的、社会的成果を含めて、全体として障害児にとって利用し易いようにする義務を負っている。」ことが宣言されている。これは北欧や北米のノーマライゼーションをさらに進めて、従来「通常」とみなされていた社会一般の在り方の変革を求める姿勢が、明確に打ち出されたといえる。その後アメリカ合衆国では、メインストリーミングという障害を持つ子どもをできる限り通常学級内のプログラム（特殊学級、リソースルーム、通常学級）に向けて措置することが目指されることになる。こうして様々な国が、インテグレーションを通過点としながら次の世代の教育形態を目指して進むことになった。

1985年の3月にユネスコによる第4回成人教育国際会議（The Forth International Conference On Adult Education）がパリにおいて行われた。この中でサラマンカ声明にも使用されている「特別なニーズ（special needs）」という言葉がすでに使われている。それは特別なニーズを必要とするグループとして女性や若者、高齢者も例にあげられる中で、障害者もそのひとつとして含まれている。すでにサラマンカ声明から9年前にこの言葉が使われ、インクルージョンへ向けての布石が打たれていたと考えられる。

障害児・者に対する施策の流れ(世界と日本)³⁾

施策内容(世界)

- 1971 「知的障害者の権利宣言」(国連)
- 1975 「障害者の権利宣言」(国連)
- 1978 ウォーノック報告（英）「教育上特別な取り扱いを要する児童生徒の判別基準について」
- 1980 WHO国際障害分類
- 1981 国際障害者年
- 1982 「障害者に対する世界行動計画」

- 1983 「国連・障害者の十年」開始
- 1989 「子どもの権利条約」(国連)
- 1990 「アメリカ障害者法」(米)
- 1992 「アジア太平洋障害者の十年」開始
「障害者の機会均等化に関する基準規則」
(国連)
- 1994 特別なニーズ教育に関する世界大会「サラマンカ声明」(ユネスコ)

施 策 内 容 (日本)

- 1948 「盲学校及び聾学校の就学義務および設置義務に関する政令」公布
- 1953 「教育上特別な取り扱いを要する児童生徒の判別基準について」通知
- 1970 「心身障害者対策基本法」公布
- 1979 養護学校義務教育制実施
- 1993 「障害者基本法」公布
- 1995 「障害者プラン（ノーマライゼーション7カ年戦略）」施行
- 2000 「交通バリアフリー法」施行
- 2002 「身体障害者補助犬法」制定・施行

2. サラマンカ声明

1) サラマンカ声明とは

1994年6月スペインのサラマンカにおいて、ユネスコとスペイン政府共催による「特別なニーズ教育に関する世界会議」での「特別なニーズ教育に関するサラマンカ声明」が採択された⁴⁾。この年の6月7日から10日にかけてこの地において92カ国の政府と25の国際組織を代表する300人以上の参加者が集まって、インクルーシブエデュケーション（inclusive education）の達成を前進させる、言い換えれば学校がすべての子どもたち、とりわけ特別なニーズを持つ子どもたちに役立つために、ユネスコとスペイン政府が協力して組織された会議のことである。[尚、この声明は全英文で構成されて

おり、日本語として適切な語がない場合は英文を日本語の読みとしてそのまま使用する。例えば、インクルーシブ、インテグレーション、インクルージョン等。]

この会議には、国際連合および専門機関、他の国際的な政府組織、非政府組織、基金提供機関の代表、教育行政担当者、行政家、政策立案者、専門家が出席した。この時、「特別なニーズ教育における原則、政策、実践に関するサラマンカ声明ならびに行動の枠組み（Salamanca statement on principles, policy and practice in Special Needs Education and a Framework for Action）」を採択した。これらはインクルージョンの原則、「すべての人のための学校」すなわち、すべての人を含み、違いを表し、個人のニーズに対応する施設に向けた取り組みの必要性を表明している。またこの声明には、すべての人のための教育を達成するための、学校を教育的に、より効果的なものとするための課題に対して素晴らしい貢献がある。

2) サラマンカ声明の構成

表紙、挨拶、声明文、本文から組み立てられていて、本文は全部で85の段落に分かれている。その段落ごとに番号が付けられている。

表紙については後で述べるように、インクルージョンをより鮮明に理解してもらえるように、視覚的にインパクトのあるマークで表されている。挨拶文、声明文については重要な内容をおおまかに掲げられてあるのだが、本文に入ってくるとどのように具体的なインクルージョンへの取り組みをしていくのかが書かれている。この本文の最初は、インクルージョンあるいはインクルーシブな学校とはどういうものかという説明がされていて、世界のどの国にも当てはまるような配慮がなされている。それには国家としての政策の重要性や、障害によっても教育方法に違いのあることを説明している。

学校の立場からは、カリキュラム、評価方法、援助方法等のより具体的な方策を示している。教職員の養成・研修へも様々なネットワークを使い、他との連携の必要性を説いている。外部からの支援は特に重要で、様々な機関、部門、施設からの支援をどう受けるのかという内容が示されている。

本文のそれぞれの章別でのテーマを段落数も付けて紹介する。

サラマンカ声明の章ごとのテーマ⁵⁾

| 章ごとのテーマ | 段落数 |
|-------------------|-----|
| はじめに(本文への導入的説明) | 5 |
| 特別なニーズ教育による新しい考え方 | 9 |
| 国際レベルでの行動指針 | |
| A 政策と組織 | 11 |
| B 学校という要因 | 2 |
| (カリキュラムの柔軟さ) | 7 |
| (学校の管理・運営) | 3 |
| (情報と調査・研究) | 2 |
| C 教職員の任用と養成 | 9 |
| D 外部からの支援サービス | 3 |
| E 優先度の高い分野 | 1 |
| (幼児期の教育) | 2 |
| (少女の教育) | 1 |
| (成人生活への準備) | 1 |
| (成人教育および継続教育) | 1 |
| F 地域社会からの展望 | 1 |
| (両親の協力) | 4 |
| (地域社会の関与) | 3 |
| (任意団体の役割) | 2 |
| (公衆の意識) | 2 |
| G 資源の必要性 | 4 |
| 地域レベルと国際レベルでの行動指針 | 12 |

サラマンカ声明のおおまかな要旨は次の通りである。

- 特別な教育的ニーズを持つ児童・青年・成人に対し通常の教育システム内での教育を提供する必要性と緊急性を認識している。
- 特別な教育的ニーズを持つ子どもたちは、そのニーズにあった児童中心の教育である通常の学校にアクセスし、この学校こそ差

別的態度と戦い、地域社会の形成、インクルーシブな社会を築き、すべての人の教育を達成する最も効果的な手段である。

- この枠組みの原則としては、学校という所は、子どもたちの身体的、知的・情緒的・言語的もしくは他の状態と関係なく、「すべての子どもたち」を対象とすべきである。当然、障害児や英才児、ストリート・チルドレンや労働している子どもたち、人里離れた地域や遊牧民の子どもたち、他の恵まれていないか、辺境で生活している子どもたちも含まれる。これらの状態から学校システムに大きな挑戦をすることになる。特別な教育的ニーズという用語は、このニーズが例に挙げた子どもたちと関連してくる。これら多くの子供たちが学習の困難を経験し、学校生活で特別な教育的ニーズを持っている。学校はこの状況の中でうまく教育方法を見つけねばならない。このことがインクルーシブな学校の考えに至る。インクルーシブな学校はまったく恵まれていない子どもたちや、障害を持つ子どもたちも含めたすべての子どもたちを教育することができる児童中心教育学を開発することで、そうなれば質の高い教育を提供することが可能になる。また、この学校を造ることで差別的態度を変えることを進めることができ、地域社会を築く上でも重要な段階となる。

社会の見方の変化は緊急の課題で、長期にわたり障害を持つ人々の諸問題は、その潜在的可能性に対してより、彼らの欠陥に焦点を向ける問題をはらんだ社会によって作り上げられてきた。

- この特別なニーズ教育は、確固とした教育学の立証された原則を取り入れられていて、人間に相違が見られるのは当然のことで、学習は学習過程の速度や性質に関して

予定された過程に子どもをあわせるよりも、子どものニーズに応じて調整されなければならないことを想定している。

- 児童中心の教育学は、すべての子どもたちに有益であり、全体としての社会にも有益なものである。多くの教育システムに見られる平均学力水準は高いが、落第や留年も多いという例を減少させられることがわかっていく。児童中心の教育学は「一つの寸法に全部を合わせる」方式の教育を行った結果、起こってくる子どもの希望を打ち砕いたり、資源をただ浪費するだけということを避けることに力添えすることができる。児童中心の学校は、すべての人々の相違と尊厳とを尊重する人々を中心とする社会を築く訓練の場といえる。
- 政府へのこの教育システムの改善と政治的・予算的優先性の要求を行う。
- ユネスコ、ユニセフ、国連開発計画、世界銀行等の国際社会への協力要求を行う。等が掲げられている。

3. サラマンカ声明への考え方

1) ログマークの意味

図1⁶⁾



表紙は中心に大きく「特別な教育的ニーズにおけるサラマンカ声明と行動の枠組み」と表題が書かれている下に小さなログマークが2つ並んでいる。左側はパルテノン宮殿の形をした絵の中にUNESCOと書かれている。常時使用されるユネスコのマークであるが、平行した右側

には120度で曲がる6本の太い線と底辺で支える1本の線で構成されたマークがある。一見何を意味しているかわからないが、よく見ると花の形に見えてくる。そして、線の一つひとつが下のほうにくるとその線が真ん中に入ってくるように見える。つまり、中心へ集まっているのである。これはどんな人もすべて一つにまとまるということの意味しているのではないだろうか。障害があってもなくても、すべての人々がひとつにまとまりつながっている状況が想像できる。またこの線を手の形に考えると、大きい手が上へいけばいくほど小さくなる手を支えていることがわかる。それを国として考えても大きい国が小さい国を支えているように見える。人として考えても、力があつたり裕福な人々が障害者や弱い立場の人を支えているということになる。真ん中にあるはさまれた格好になっている手は、大きい手に支えながらも小さい手を支えている。この形を作ることが最終的に大きなひとつの花を咲かせることになるということをも主張している。また、仮にこの形をインテグレーションの表現だと考えた場合、インクルージョンがどこかに入れられていなければならない。120度に曲がっている線をばらばらにはずし、同じ長さの3本の線どうしを120度の角を内側にしてつなげるとこの正六角形が大小2つできる。小さい正六角形を大きい正六角形の中に入れると大きい正六角形に内接してうまく収まってしまう。これが正にインクルージョンを表している。全てがひとつに収まるのである。インクルージョンということを本文では長々と文字で説明してあるが、ひとつの絵だけで、インクルージョンを説明していることになる。

2) スペインのサラマンカで開催された意義 (歴史的な意味から)

この声明は世界の全ての国に対して発信されたということであるが、みんな違った教育事情

であり、どのように各国にあったサラマンカ声明の読み取り方をするのかというのは大変重要になってくる。そこで、まず世界の国を大きく二つに分けた捉え方ができると考えた。それは、中南米、アフリカ、オセアニアを中心とする15世紀以降侵略されたもしくは植民地とされた国々とそれ以外の国である。これらを分けて考えないとサラマンカ声明の理解ができなくなり、迷宮に迷い込んでしまう。特に、侵略されたもしくは植民地化された国の歴史を考えたい。

このサラマンカ声明が採択された1994年からさかのぼること約500年前の1492年8月3日コロンブスが黄金の国ジバングを目指して西回り航路で第1回目の航海に出発した⁷⁾。これがサラマンカ声明との関係が始まったといっても過言ではない。当時、ポルトガルもスペインとしのぎを削ってアフリカ大陸への南下を開始し、1488年には喜望峰まで到達し、東回りインド航路の開拓を目前にしていた。そのコロンブスがポルトガルに西回り航路をすすめても関心を持ってもらえず、スペインに話を持ちかけていた。しかし、当時のサラマンカ大学の学者たちは、途中で止まる港もなく、長い航海を続けるのは危険が大きい割に経済的利益は期待できないとして反対をした。しかし、キリスト教の後押しで許可が下り、現在のバハマ諸島のサン・サルバドル島にたどり着いた。コロンブスは当然アジアの一部だと信じていた。これがサラマンカ声明の中にある、「インクルーシブな学校は障害児や英才児、ストリート・チルドレンや労働している子どもたち、人里離れた地域の子どもたちや遊牧民の子どもたち、他の恵まれていないか、辺境で生活している子どもたちも含まれる、すべての子どもたちを対象にする。」と宣言しなければならない状況に近づくことになる。この悲愴な状況を全てとは言えないまでも、一部きっかけをつくったのがこのスペインの行為から始まったと言えるのではないだろうか。

第2回目の航海でカリブ海のエスパニョーラ島で先住民への酷使と混乱に始まり、アメリカ・ヴェスプッチ、マゼラン、エルナン・コルテスに引き継がれることになる。コルテスは1519年メキシコ海岸に上陸し、2年後には900人のスペイン人で数10万の兵士がいたアステカ帝国を滅ぼし、膨大な財宝を略奪している⁸⁾。ここでは、多文化の考え方は受け入れず、他者の行動と世界のあり方に自らの手で改善を加えていくものという考え方が芽生えてきた。もしくはヨーロッパ人が以前から持っていたものかもしれない。また、同じく悲愴な目にあったのがインカ帝国だった。これは、フランシスコ・ピサーラが168名のスペイン人を引き連れて何万もの兵力のあるインカ帝国を崩壊させた。

アステカ帝国の領域では征服前の人口はおおよそ1,100万人であったと思われるが、1600年には100万人程度になっている。スペイン人が先住民に対して無目的な無差別大量虐殺を行ったのである。それ以外にもスペインの持ち込んだ疫病や、征服による先住民の社会や価値体系が崩壊したために彼らの精神と生活が荒廃し、酷使され虐待されたために身体の抵抗力が弱って、疫病の流行につながったともいえるだろう。先住民狩りは150年続き、ひとつの地域の住民が全滅してもアフリカにまで遠征し、黒人奴隷を連れてきて働かせ、そこで得られる富をヨーロッパに送るという循環が行われた⁹⁾。砂糖のプランテーションで使役する黒人奴隷の貿易は実に悲惨で、16世紀から18世紀にかけて3,000万人から6,000万人に及ぶ黒人がアメリカ大陸に向けて積み出され、そのうちの3分の2が航海の途中で命を落とし、海中に捨てられた。また、1500年から1640年の間にスペイン領南アメリカからヨーロッパに金が約180トン、銀が約17,000トンという莫大な量の貴金属が流入した。後の中南米が資源もなく、貧困な国々として今も存続しなければならない理由がここ

にある。

また、東南アジアのルソン・ミンダナオ諸島も占領し、スペイン王の名、フィリップにちなんでここをフィリピンと命名したのは有名な話である。以後、330年にわたり植民地とし、17世紀半ばには過酷な強制労働で支配地区の推定71万人の人口から59万人まで減った。

この後、17世紀にはオランダがアジアを占領し始め、インドネシアでは320に分かれた部族語をそのまま放置し、民族を分断して支配する方法をとっている。また、連合東インド会社を設立し、現地住民の実情は無視して利益を搾れるだけ搾り続けた。18世紀にはイギリスとフランスが争って北米大陸へ勢力を広げ、インディアン土地を略奪へと引き継がれた。北米大陸を植民地化した人々は増税反対の理由から独立戦争に至った。これに触発された中南米も移民たちが次々に独立し、スペイン、ポルトガル本国が没落の一途をたどる結果になった。しかしこの独立はあくまで白人移民の独立で、原住民は相変わらず奴隷同様のままであった。また、イギリスは植民地アメリカを失った。現状打開を目指してカナダ、南アフリカ、オーストラリア、ニュージーランドを侵略していった。このオーストラリアには流刑者の植民地として人々が送り込まれ、またも虐殺・略奪・強姦の先住民への悲劇が繰り返された。移民たちは動物狩りのように、レジャーとして先住民アボリジニーを虐殺した。30万人いたアボリジニーは100年後には67,000人に激減した。タスマニア島では37,000人のタスマニアンアボリジニーが絶滅した。

独立したアメリカは、強制的にミシシッピの西の保留地へ移住させられ、その途中でインディアン4,000人が死亡した。しかしその西の保留地に金鉱が発見されると即座に奪い取り、侵略と略奪に明け暮れた。現在も続く南米やアフリカの貧困はヨーロッパを中心とする国々が

現地の歴史、文化を破壊しつつし、現地の長く培われてきた経済システムを完全に無視し、自分たちの利益のみを考え、単一作物生産を続けた後遺症が今も影響し続けていることを熟知しておかなければならない。

サラマンカ声明の中でも強調しているのは、全ての人への教育をするために差別的態度を変えることであり、障害児やその他教育を受けられていない子どもたちを誰が支えていくのかということであり、過去の歴史的な面を見ればおのずと答えが出てくる。いったいこの富める国と貧しい国、障害児を差別的態度で見ると、肌の色で差別する気持ちの発端はどこにあったのか、原因は何であったのかを理解する必要があるだろう。その歴史的事実を理解した上で読むとはっきりしてくるものがある。それゆえ、この声明がスペインで採択されたのは大きい意味がある。500年前に貧しい国を作り出すきっかけとなった国が、あらためて自らが貧しい国を復活させようとするきっかけを作っているのである。この声明の表紙にあるロゴマークの意味は、富める国が貧しい国を支える意味があると説明した。この富める国が過去に犯した過ちを償う意味が潜んでいると考える。だからこそ今、反対に貧しい国を支えるのだという気持ちがこめられていると思う。本文の中に、「あまりにも長期にわたり、障害を持つ人々の諸問題は、かれらの潜在的可能性に対してよりも、むしろ彼らの欠陥に焦点を向けるという問題をはらんだ社会によって作り上げられてきた」ということは表現してあるが、その裏に潜む過去の歴史のことは書かれていない¹⁰⁾。つまり、その時の差別の事実と今も貧困のままの原因は載せられていない。載せたくても載せられない問題を含んでいると考えられる。しかし、これを明らかにしないと本当に貧しい国を支えていこうというのが形骸化されかねない。障害という枠にとらわれない全ての差別の考え方を改める方

法がないと前進させるのが困難になる。

3) 本文からインテグレーションとインクルージョンの違いを探る

インテグレーションとインクルージョンの違いについては、この声明の本文の中でいくつか理解できるところがある。文章の中でいったいそれがどういう使われ方をしているのかを考えてインクルージョンの意味を探りたい。この声明の中で重要ポイントとなる言葉である、インテグレーションとインクルージョンがどういう場合に使われて、どういう意味にとらえられているのか、また、その形容詞や動詞で使われている場合に、従来訳されている意味とは違ってくるのではないかと考えた。それを検証するため、このふたつの言葉をさまざまな角度から考えることにした。

まずこの声明に出てくるインテグレーションとインクルージョンの言葉の数はどうなのか。これで重要度はある程度はわかってくるのだが、この声明は、「サラマンカ声明文」と本文の「行動の枠組み」のふたつに大きく分かれている。まず、インテグレーションは「行動の枠組み」にのみ10回、形容詞、動詞としてのインテグレートは「行動の枠組み」に6回使用されている。インクルージョンは「サラマンカ声明文」に1回、「行動の枠組み」に11回出てくる。ただ形容詞としてのインクルーシブは「サラマンカ声明文」に10回、「行動の枠組み」に23回出てくる。これはどういうことかと言えば、インテグレーションとインクルージョンの使用頻度はほとんど同じで、意味が同じならインテグレーションを使わなくてもよいはずである。しかし、あえてインテグレーションを使っているのは、インクルージョンと区別してそのインテグレーションの意味(差別をなくして一緒に統合する)を強調したい場面が出てくるからである。だから、インテグレーションを使用

しているのである。逆に、今後のことも考えて、インクルージョンももっと使用されてもよいと思われるが、形容詞として使われているインクルーシブが他のスクールやエデュケーションと合体させて、ひとつの言葉として使われるので、このインクルーシブがインクルージョンと同じ意味に近い形で使われていると考えてよい。だからインテグレーションとインテグレートを合計すると16回、インクルージョンとインクルーシブを合計すると45回となり、いかにインクルージョンを強調しているのかがわかる。また、インクルーシブの数が多いのは、インクルーシブな学校や教育を広めたり、作ったりすることが強調されるため、何度も繰り返し使用されることになる。ただし、ここではインクルージョンもインクルーシブも頭文字が大文字になっていない。固有名詞にするのであれば、頭文字は大文字にするべきであるが、そうならずに小文字のままである。これは世界の国々へのメッセージであるから、それぞれ国の事情は異なるわけで、全ての国で同じようなインクルージョンを目指すわけではなく、それぞれの国にあったインクルージョンを目指さなければならぬ。だから、固有名詞としてのインクルージョンではなく、より柔軟性を持たせる意味で、一般的な頭文字を小文字にしたインクルージョンになっているのである。

インテグレーションとインクルージョンの関係を表す文が合計3ヶ所ある。まず1つ目は段落で言えば6番目の1行目からで、「過去20年間における社会政策に見られた傾向は、インテグレーションと参加を促進すること、そして排除と戦うことであった。インクルージョンと参加こそ人の尊厳や人権の享受と行使にとって必須のものである。」と表している¹¹⁾。つまり、過去の20年間は、差別に反対した取り組みを努力して一緒にになれるよう続けてきた期間であった。しかし、今後は全ての人の参加が重要であ

るということを主張している。はっきりと今日からはインクルージョンにとって代わるのだという強い意志のあらわれを感じる。そして一部の人を対象としたものから、全ての人を対象にした考え方に変化してきている。2つ目は、段落の15番目で、その部分では、「インテグレーション教育と地域社会に根ざしたりハビリテーションは、特別なニーズを持つ人々に役立つための相補的、相互支援的な働きかけを意味している。両方ともインクルージョンの原理とインテグレーションと参加に基づいており、また全ての人のための教育を達成することを目指した全国の方略の一部として、特別なニーズを持つ子どもたちに対するアクセスの平等を促進する、十分に検証された費用効果の高い働きかけでもある。」となっている¹²⁾。インテグレーションやインクルージョンも両方とも障害者への平等の教育という点では意味的に一致するのだが、それに至る過程での方法の仕方が違ってくると考えられる。インクルージョンばかりを強調し推し進めるだけでなく、インテグレーションも継続する必要性が説かれている。3つ目は段落の68番目から69番目にかけて、その違いがもっとわかりやすくなっている。その内容は、「学校レベルを含め、あらゆるレベルの政策立案者は、インクルージョンへの彼らの関与を定期的に再確認し、特別な教育的ニーズを持つ人々に対する子どもたち、教師、公衆の肯定的な態度を促進すべきである。」また、「マスメディアは、障害者の社会へのインテグレーションに対する肯定的態度を促進し、偏見や誤った情報を追い払い……。」とある¹³⁾。ここからインクルージョンの原理として、全ての人々を平等に扱う、同じレベルで考える、同じ気持ちで包み込むという考え方と、インテグレーションにおける社会等へ障害者が入っていく状況が想定され、そのニュアンスの違いが読み取れる。現実にはインクルージョンがより理想的なのだ

が、インテグレーションされていないところもあり、それも並行してすすめなければならない状況がある。インクルージョンはインテグレーションと相反するものではなく、偏見や差別を除去する意味から、そこへたどり着く考え方の順序としてインテグレーションが先に表明され、その後インクルージョンの考え方が出てきたのである。

また、インクルーシブな学校という言葉が何度も出てきているが、これはあくまで様々な国があると想定している上で曖昧な名前をつけているだけで、全ての子どもたちが同じ学校内で学べる環境のある学校という意味でそう呼んでいるのである。特に人口が少ない所に住んでいる開発途上の国々の障害を持つ子どもたちは、障害児学校には必ずしも行けているとは限らない。そういう場合にインクルーシブな学校が重要になってくることを強調している。

段落の13番目に女性の障害については、その障害を持っている上に性にに基づく偏見の二重苦があると説明している。「女性と男性は……。」と女性を主にした書き方で、女性への認識を高めるよう特に強調している¹⁴⁾。一般的には男性の障害も女性の障害も同じではないかと考えるのだが、侵略されたかもしくは植民地化された国々の障害を持つ女性に対しての偏見は、想像以上のものがある。我々のように日本に住んでいる場合は、それをなかなか感じないものなのである。

おわりに

今回、過去のインクルージョンへの道のりはたどることができ、本来のインクルージョンのあるべき姿へは少し近づけたのかもしれない。しかし、今後まだ研究しなければならないテーマが残されている。それは現在の時点における侵略されたもしくは植民地化された国では、障

害者への教育がどこまでなされているのか、また、インクルージョンにどれだけ近づくことができているのか探らなければ意味がない。世界へ「サラマンカ声明」が大きく一歩踏み出しても、実際に行動に移さないと意味がないのである。これを調査すべき課題が残されている。また、それ以外の国のインクルージョンは「サラマンカ声明」によって影響を受けてより進むことができたかどうか知る必要がある。より進んだ国、スウェーデンやイタリアなどはうまく機能しているのか、継続されているのか、もし継続されているならそれを学ぶ必要がある。そして最後に日本のインクルージョンの分析と今後の可能性を探る必要がある。今、日本はどの程度障害児と一緒に学習をする時間があるのか。それが効果的な方法として行われているのかどうかはとても重要なことである。「サラマンカ声明」の影響をもし日本が受けたとするならば、文部科学省から2003年3月に出された「今後の特別支援教育のあり方について」の最終報告書になるだろう。これに対しては様々な意見があるのだが、個人的には「サラマンカ声明」の部分を意識した所もいくつか出ていて考える。インクルージョンという言葉は出ていないが、「共有することが有効」と言うような表現が使われている¹⁵⁾。これは「サラマンカ声明」の解釈を一部日本の教育事情に合わせるか、もしくは転換させて作成されたと考えられる。それは、侵略されたもしくは植民地化された国以外の立場として作成されているといえるだろう。小・中学校においてはほぼ完全といえる就学率で、障害児も義務制で重度の子どもであってもほとんど就学措置ができている。世界の中ではとても恵まれた環境の中でどう「サラマンカ声明」のメッセージを実行できるかということであろう。この「今後の特別支援教育のあり方について」の報告の内容から、スウェーデンのたどった障害児教育と重なる部分も認め

られる。しかし、教育費は減らさないという強い意志も感じられるので、はたして日本はどこまで改革を進められるのか注目していかなければならないだろう。

【注】

- 1) 森博敏編著「特別ニーズ教育」「特別支援教育」と障害児教育 群青社 2002 p.62
- 2) 井谷善則 今塩屋隼男編「障害児教育」 ミネルヴァ書房 2001 p.62～p.63
- 3) 同上p.212～p.213
- 4) サラマンカ声明公式文 ユネスコ 1994 p.4
- 5) サラマンカ声明日本語訳文
http://dove.ne.jp/sumomo/siryou_folder/Salamanca.htm/ p.2～p.4
- 6) サラマンカ声明公式文 ユネスコ 1994 p.1
- 7) 立石博高 関哲行 中川功 中塚次郎編「スペインの歴史」 昭和堂 1998 p.98～p.103
- 8) 小林よしのり著「新ゴーマニズム 戦争論3」 幻冬舎 2003 p.166
- 9) 同上 p.169～p.184
- 10) サラマンカ声明日本語訳文前掲 p.3
- 11) 同上
- 12) 同上 p.4
- 13) 同上 p.9
- 14) 同上 p.4
- 15) 文部科学省「今後の特別支援教育のあり方について（最終報告）」
http://www.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/018/toushin/030301a.htm

【参考文献】

- ・ K-G アールストレーム E. ヴァリン I. エマニュエルソン著 二文字理明訳編
「スウェーデンの障害児教育改革」 現代書館 1995
- ・ 渡邊益男監訳「特別なニーズ教育への転換」 川島書店 1997
- ・ 宮崎正勝著「早わかり世界史」 日本実業出版社 1998
- ・ 横山岑夫著「特殊教育から教育改革への発信」 多

賀出版 1998

- ・L. パートン F. アームストロング編 嶺井正也監
訳「障害、人権と教育」 明石書店2003
- ・高橋智著「世界の特殊教育・特別なニーズ教育」
三友社 1999
- ・伊藤隆二著「全包括（インクルーシブ）教育の思
想」 明石書店 1998
- ・藤田修編著「普通学級での障害児教育」 明石書店
1998
- ・高橋智 渡辺昭男編「特別なニーズ教育と学校教
育 ―歴史と今日の課題―」 三友社1999
- ・清水貞夫著「特別支援教育と障害児教育」 かもが
わ出版 2003
- ・堀正嗣著「障害児教育とノーマライゼーション
―共に生きる教育をもとめて―」 明石書店
1998
- ・山口薫 金子健著「特殊教育の展望 ―障害児教
育から特別支援教育へ―」 日本文化科学社
2000

